



▲節分大護摩(2014年2月3日)



▲役行者像



▲行者堂の内部



▲行者堂(三宅中4丁目)

三宅龍王講が祀る役行者像
大峰修験道(山伏)の先達

屯倉神社(三宅中四丁目)の西南角に行者堂が建っています。行者堂は、三宅の龍王講が役行者(役小角)を祀っているお堂です。役行者は、飛鳥、奈良時代の山岳修行者で修験道の祖とされています。大和吉野の大峰山(山上ヶ岳)などを開いたと伝わっています。亡くなって神変大菩薩という諡号を賜りました。

江戸時代後半以降、大和や河内の村を中心に大峰山に登り、信仰を深めて講をつくる在俗者の集団ができていきました。大峰山には、いわゆる山伏らの根本道場として龍泉寺(真言宗醍醐派)が建てられていましたので、これらの講は山上講・大峰講・龍王講・龍泉講・行者講などと呼ばれていました。三宅の龍王講もその一つです。もともとは三宅行者講として誕生しましたが、明治二十七年(一八九四)に大峰山龍王講社本部である龍泉寺の直轄講社となったことから、以後、三宅龍王講と称するようになりました。当初は、毎月、三宅の先達ら講員宅に集まって信仰を持っていました。その後、昭和二十二年(一九四七)になって、これまで役行者を祀る行者堂が無かったので、戦前から三宅の講員と交流のあった大井(藤井寺市)の大井講で祀られていた江戸時

代前半の役行者像を譲り受け、現在地の屯倉神社境内に行者堂が建立されたのでした。ここには、日露戦争(一九〇四〜〇五)に出兵した三宅村出身者の記念碑が建てられています。だが「歴史ウォーク」103、お堂建設のため、石碑は今の場所にその北側に移設されました。

行者堂は昭和三十六年(一九六一)の第二戸台風で倒れましたが、古木などを利用して補修し、これまで役行者像だけであった室内に、不動明王像や弘法大師像なども祀られるようになったのです。その後も、再び行者堂新築の声が高まり、平成元年(一九八九)、現在の行者堂が完成しました。

堂正面に「三宅龍王講 行者堂」の扁額が掲げられ、中に入ると、護摩壇が設けられ、「神変大菩薩」の大提灯の奥に役行者木像が祀られています。神仙思想の影響を受けた長頭巾に一本歯の高下駄をはき、法衣に袈裟をかけ、錫杖と経巻を持った肖像彫刻です。

堂内では毎月、二月を除いて七日(八月は第一週の土日に大峰山に登るため、前日の金曜日)に月護摩が行われています。そして、毎年二月だけは、三日の節分の日、「節分奉修紫燈大護摩」と呼ばれる祭儀が堂前の広場で大々的に行われます。

節分の当日、午後五時すぎ、堂前に薪や柴で組まれた護摩壇がつくら

れ、山伏姿の龍王講の先達らが現れます。彼らは、行者堂に向かって般若心経を唱えた後、三宅の氏神である菅原道真を祀る屯倉神社本殿前や北隣りに合祀されている同じ三宅の延喜式内社であった酒屋神社でも般若心経を誦経します。明治時代初期までの神と仏教を折衷して融合調和する神仏習合のなごりをとどめているのです。

再び堂前に戻ると、続いて「山伏問答」と呼ばれる旅の先達の答者と地元道場主の問者との問答を行います。問者…案内申。案内申。問者…受け給ふ、受け給ふ。旅の行者、住山何れなりや。問者…河内州屯倉の住。真言宗醍醐派別格龍泉寺直属の先達なり。問者…本日、当道場に来山の儀は如何に。

右のように始め、先達が龍泉寺直属の三宅の山伏であることを法儀にのっとり長々と答えていくのです。問答が終わった後は、「斧振之儀」「法剣之儀」「法弓之儀」の順に作法を行い、いよいよ護摩壇に点火されます。勢いよく燃えさかる火の中に人々の願いが書かれた護摩木が投入され、節分行事がクライマックスを迎えるのです。

今年も二月三日の夕刻から節分の大護摩が行われます。伝統行事に触れるため、毎年、多くの参拝者がつめかけられるのです。